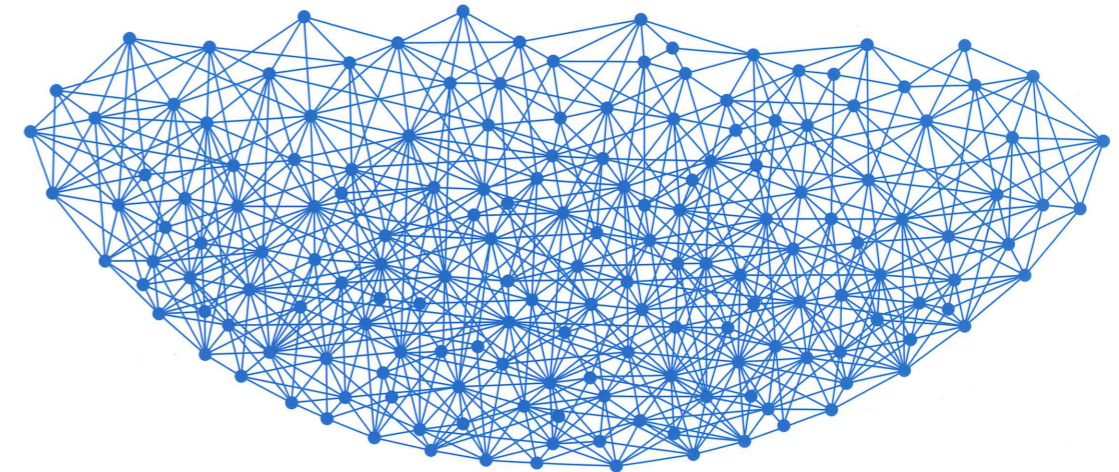


第4回 旧三商大OB 男声合唱団 交歓演奏会

南漣会合唱団 (大阪市立大学 OB 合唱団)

六甲男声合唱団 (神戸大学 OB 合唱団)

マーキュリー・グリー・クラブ (一橋大学 OB 合唱団)



(連絡先)

南漣会合唱団 : 尾崎 納

Tel : 0742-47-7554

E-mail ham38220@rio.odn.ne.jp

東京南漣会合唱団 : 田中 利治

Tel : 048-977-1522

E-mail toshi-tanaka@kpe.biglobe.ne.jp

六甲男声合唱団 : 堀内 丈義

Tel : 075-491-8003

E-mail pipohoriu@yahoo.co.jp

東京六甲男声合唱団 : 矢内 忠雄

Tel : 04-7144-7669

E-mail yauchi79@ka1.koalanet.ne.jp

M. G. C. : 宮内 隆造

Tel : 048-960-0381

E-mail hqj07112@nifty.ne.jp

2009年11月29日

大田区民ホール・アプリコ : 大ホール

ごあいさつ

ようこそおいで下さいました。

神戸大学、大阪市立大学、一橋大学はそれぞれ古い歴史を持つ大学ですが、戦前から戦後の学制改革まで、“商科大学”を名乗った時期があり、互いに学術、文化、スポーツなどにおいて深い交流を続けておりました。

音楽活動においても「三商大交歓演奏会」がありましたが、戦時中は中断し戦後 1955 年に至って復活、以来、現役学生達は半世紀を超える交流を続けてまいりました。

私どもOBにとりましても若かりし頃のその思い出は鮮明に脳裏に焼きつき、青春時代の懐かしい一ページを飾っております。

1999 年に遅れ馳せながら一橋大学OBによる男声合唱団マーキュリー・グリーン・クラブ (MGC) が設立されたのを機に、OB達による「旧三商大交歓演奏会」の開催機運が高まり、2003 年、東京調布市において「第 1 回 旧三商大 OB 男声合唱団交歓演奏会」を開きました。以後、二年おきに大阪、神戸、と続き、今回再び東京で「第 4 回」の交歓演奏会を開催する運びとなりました。

ご覧いただきます通り、オールドマンが目立ちますが、彼らの心は青春そのもの、人生経験を豊かに織り込んだ歌声を最後までごゆっくりとお楽しみいただければ幸いです。

本日はまことにありがとうございました。

2009 年 11 月 29 日
南 濤 会 合 唱 団
六 甲 男 声 合 唱 団
マーキュリー・グリーン・クラブ



2007 年 11 月 17 日
旧三商大OB男声合唱団
第 3 回交歓演奏会
於 神戸新聞松方ホール
エール交歓ステージ

プログラム

南濤会合唱団・東京南濤会合唱団

『男声合唱のための組曲 旅』より

佐藤 眞作曲 山之井 慎、田中 清光作詞

指揮 : 三栖 隆
ピアノ : 城戸 敬子

旅立つ日
なぎさ歩めば
かごにのって
旅のあとに
行こうふたたび

六甲男声合唱団・東京六甲男声合唱団

『男声合唱とピアノの為のジプシーの歌 (Zigeunermelodien)』

ドヴォルザーク作曲 アドルフ・ヘイドウック詞 福永 陽一郎編曲

指揮 : 井上 和雄
ピアノ : 島崎 央子

わが歌ひびけ
きけよトライアングル
森はずかに
わが母の教えたまいし歌
弦を整えて
軽い着物
鷹は自由に

休憩

マーキュリー・グリーン・クラブ

『ウィーン』の歌』

指揮 : 永井 宏
ピアノ : 中野 マリ
小太鼓 : 大場 章裕

ウィーン我が夢の街 ジーチンスキー曲 荒谷 俊治編曲
ヴィリアの歌 レハール曲「メリーウイドウ」より 荒谷 俊治編曲
唇は語らずとも レハール曲「メリーウイドウ」より 荒谷 俊治編曲
美しく青きドナウ J. シュトラウス II 世 曲
ラデツキー行進曲 J. シュトラウス I 世 曲

合同演奏

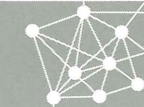
『男声合唱組曲 月光とピエロ』

清水 脩作曲 堀口 大学作詩

南濤会合唱団
東京南濤会合唱団
六甲男声合唱団
東京六甲男声合唱団
マーキュリー・グリーン・クラブ

I 月夜
II 秋のピエロ
III ピエロ
IV ピエロの嘆き
V 月光とピエロとピエレットの唐草模様

指揮 : 永井 宏



「男声合唱のための組曲 旅」

作曲家佐藤 眞は1938年茨城県の生まれです。作品は交響曲、オペラ、合唱曲など多岐にわたっています。特に1960年代初め、東京芸術大学の院生の頃、合唱好きな人なら誰しもが良く知っている「蔵王」、「旅」、「土の歌」があいついで発表され、多くの合唱団で演奏されてきました。

これらの曲は決して難解なものではなく、力強く美しい旋律とハーモニーの中に優しさや切なさが満ち溢れており、歌う度に楽しさが増してきます。しかしその中に合唱にとって大事な多くの要素がちりばめられているように思います。

演奏する「旅」は、氏の20代前半を飾る傑作のひとつであり、全7曲からなる組曲で、混声合唱を男声合唱用に編曲したものです。

本日はその中から5曲を演奏致します。

人は誕生したときから人生と云う長い道程の旅人となります。おおきな期待と不安を抱きながら広くてはるかな世界に一步を踏みだします。そして様々の試練を乗り越えながら新たな旅に出るのですが、そう云う若者の心の移ろいが見事に表現されています。とりわけ「旅立つ日」、「なぎさ歩めば」、「行こうふたたび」の3曲には言葉では言い表せないものに強く動かされます。「旅立つ日」は若者の旅立ちに相応しい希望と喜びに満ち溢れており、「なぎさ歩めば」は、旅半ばでしばし立ちどまり、来し方を回想する誠に美しく抒情ゆたかな曲です。終曲の「行こうふたたび」は、明るさと伸びやかさに満ち、若者の次なる旅立ちへの心意気が十分に感じられます。

《月日は百代の過客にして行きかう年もまた旅人なり》

南漣会合唱団もまもなく創立70年を迎えようとしています。

旅する若者に心を重ね合わせ元気に歌います。

(三栖 隆)



三栖 隆 (Takashi Misu) 指揮

1964年 大阪市立大学卒業。在学中、大阪市大グリークラブに所属し、1年間指揮者を努める。2000年 南漣会合唱団に入団。2003年指揮者に就任する。またロシア聖歌、ロシア民謡などスラブ音楽を中心に歌うジュピターコール合唱団にも所属し、活躍している。他にチェロを藤原士郎氏に師事。カルテット“ミリアム”を結成し、アンサンブルを楽しむ。



城戸 敬子 (Keiko Jyodo) ピアノ

兵庫県宝塚市出身。桐朋学園附属「子供のための音楽教室」を経て同高等学校、同大学ピアノ科卒。故井口基成氏、寺西昭子氏に師事。YPA、二期会、ヴォルフ協会、NHK児童合唱団などで活躍。2006年より大西のり子氏とピアノデュオ“オーキッド”結成、演奏活動を行なっている。混声合唱団コールフェニックス(神戸)ピアニスト。ピアノ指導者として“花音の会”を主宰。日本ピアノ指導者協会会員。神戸市在住。

南漣会合唱団の紹介

南漣会合唱団は1940年の大阪商科大学(現大阪市立大学)グリークラブOBと現役部員によって設立された男声合唱団を起源とし、この年に第1回演奏会を開催しました。

南漣会の名称は、大学が大阪市の南部にあることと市章の「みおつくし(漣標)」から採っております。翌1941年太平洋戦争に突入、そして敗戦。演奏の詳細な記録などは残念ながら戦中・戦後の混乱期を挟んだため残っておりません。

活動を再開したのは1953年で、1964年に32名が参加して演奏会を開催しこれを第2回演奏会としましたが継続することができませんでした。1980年母校が創立100周年を迎えるのを契機に、前年の1979年に母校のグリークラブOB組織の南漣会とは別に「南漣会合唱団」を組織、1980年に第三回演奏会を開催しました。

その後団員を市大グリークラブOBに限定することなく一般の男声合唱愛好者の参加を得て、原則隔年開催の「南漣会合唱団演奏会」の他、来年5月4日に第30回記念演奏会を予定している「五つの男声合唱の集い=ANCORの会」、隔年開催のこの「旧三商大OB男声合唱団交歓演奏会」を中心に男声合唱団として活発に活動しています。また、本日は設立後6年、東京で既に2回のリサイタルを開催するなど、その活動を軌道に乗せました東京南漣会合唱団の仲間と同じステージに立つ企画が実現しました。60名の男声合唱をお楽しみいただければ幸いです。(米田直也)



南漣会合唱団
2009.05.23 大阪国際交流センター



東京南漣会合唱団
2008.11.29 四谷区民ホール

南漣会合唱団

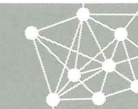
T1	尾崎 納 松波 謙至	齊藤 三朗	新 栄一郎	杉方 順二	月川 兆	福野 成雄	古川 武士
T2	今村 肇 山田 稔	大内 一	熊代 厚生	白石 太良	戸田 勝	藤田 徹夫	村山 哲郎
B1	石井 欽三 山内 荘作	石川 健夫 横田 卓郎	石原 潤一 ◎米田 直也	太田 一忠	片岡 正平	谷岡 昇	服部 栄治
B2	今道 隆夫 安井 永	上木 喜昌 和田 昭夫	小倉 裕	鎌木 武男	三栖 隆	宮田 潤	森田 清

東京南漣会合唱団

T1	天野 英樹	井上 英康	鎌田 禮章	田和 達夫	原田 佳晃	望月 豊	
T2	岡田 皓三 宮内 隆造	岡本 直久 森谷 泰明	黒田 俊之	小林 庄次郎	鶴田 観治郎	永田 利地	松本 嘉臣
B1	今井 啓太 野津 直樹	◎掛谷 正宏 宗像 弘信	川上 彰一	木田 豊	周藤 克志	田中 利治	民谷 雅美*
B2	井上 嘉雄 柚木 裕文	上村 正昭	諏訪部 和彦	中川 清	中川 博義	中西 励	平手 彰

◎は団長

*は合同演奏曲のみ



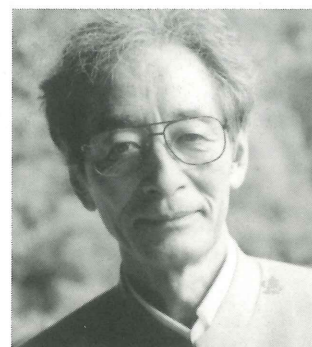
ドヴォルザーク「ジプシーの歌」

チェコの作曲家ドヴォルザーク（1841～1904）はスラブ色の強い音楽を作って新風を巻き起こしましたが、今日演奏する「ジプシーの歌」もその典型的な一つです。チェコ語とドイツ語の歌詞が併記されたこの詩は、チェコのボヘミア地方の詩人ヘイドゥクになるもので、何ものにも拘束されない自由の民ジプシーの豊かさを誇りを持って歌い上げています。その詩に曲を付けたドヴォルザークは、ウィーンの宮廷歌手で、やはりボヘミア出身のG. ヴァルターにこれを献呈しました。

第1曲「わが歌ひびけ」は、愛を語る時も、友のいまわの際にも、彼等を支えるのが歌であることが高らかに歌いあげられます。第2曲「きけよトライアングル」も、歌と同様、トライアングルという素朴な楽器を叩く喜びが歌われます。第3曲「森は静かに」はゆったりとした美しい旋律の中で、愛に満ちた歌さえあれば、死をも恐れることはないと言います。そして第4曲「わが母の教えたまいし歌」はよくご存知の名曲。年老いた母が涙をためて私に教えてくれたこの歌を、今は同じように涙をため子供達に教えている、と歌います。第5曲「弦を整えて」は、楽器の調弦をし、踊りの輪に加われ、いつ亡くなくてもご先祖様のところへ行くだけなのだから、と死からも解放された心の躍動を歌います。第6曲「軽い着物」は、金持ちや貴族のご大層な、重い衣服を擲捨し、放浪の民の自由を歌います。そして終曲の第7曲「鷹は自由に」はジプシー自らを鷹に喩えて、自然が与えてくれた命の限り、自然を相手に大空を舞う姿を誇らかに歌い上げます。

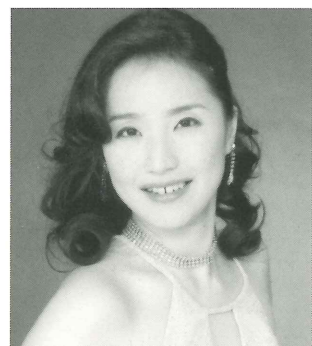
ジプシーは虐げられた放浪の民としてさげすまれて来ましたが、自然と生命と死を友とした彼等の生き方のなかにこそ人としての豊かな人生があると、美しい旋律の中で誇らかに歌われます。それが伝わることを願って演奏したいと思っています。

(井上和雄)



井上 和雄 (Kazuo Inoue) 指揮

1939年生まれ。六甲男声合唱団指揮者兼音楽監督、女声合唱団クール・フレール指揮者。著書に「モーツァルト 心の軌跡」(サントリー学芸賞)、「ベートーヴェン 闘いの軌跡」、「ハイドン ロマンの軌跡」(いずれも音楽の友社)、「ロンドン音楽紀行」(神戸新聞社)、「さらばヘーゲル」(日本経済評論社)など著書多数。今年の11月には新著「シューベルトとシューマン 青春の軌跡」が音楽の友社から出版された。また画家としても大阪、神戸で毎年個展を開催。神戸芸術文化会議員。神戸モーツァルトクラブ会長。



島崎 央子 (Hiroko Shimazaki) ピアノ

神戸女学院大学音楽部音楽科器楽専攻ピアノで学ぶ。1992年、同学部を首席で卒業。1993年、同大学音楽専攻科修了。山上明美、ゲイリー・スマートの各氏に師事。ハンナ・ギュリック・スエヒロ賞を受賞。第62回東京読売新人演奏会出演。神戸女子学院大学オーケストラ、関西フィルハーモニー管弦楽団と協演。2004年から稲庭達氏と演奏活動を続けるほか、ソロ演奏でも活躍する。また、六甲男声合唱団ほかの伴奏ピアニストも務めている。

六甲男声合唱団のこと

1954年1月に誕生。母校のキャンパスがある六甲山の麓で生まれたので『六甲男声合唱団』と命名。その年の5月僅か20名で関西合唱祭に出演、少人数にもかかわらず目指すものを如何なく発揮し、聴衆の称賛をえて当時の合唱界に新風を吹き込むことができました。しかし団員は同時に企業戦士でもあったため、日本経済の高度成長とともに超多忙、転勤などの事情が重なり、1967年頃活動休止のやむなきに至りました。1977年復活。1994年に40周年記念演奏会を開催。爾来隔年ごとに定期演奏会を開催。2004年には創立50周年記念定期演奏会を開催しました。一方2000年(フランス)、2003年(フランス)、2005年(ドイツ)に海外演奏旅行を行いました。当団の特長は音楽監督の井上が自ら発声指導をすることによって声作りと音楽作りが有機的に一貫した方針で実践できるという点です。一例として、空気=呼気の滑らかな流れでレガートに歌うことをうさく求められております。未だ道半ばではありますが、団員は厳しい要求を楽しんでいます。尚門戸は男声合唱をやりたい万人に解放されており、現在在籍団員の2割弱が神戸大グリーン卒ではありません。

本日共演致します東京六甲男声合唱団は在京グリーンOBにより2002年6月に設立、現在指揮者仲子誠一氏を招聘すると共に2名の団内指揮者のもと、重厚にして繊細なアンサンブルを目指して活動しており、来年4月には第3回定期演奏会を予定しております。

(六甲男声 / 花岡 亜光、東京六甲 / 矢内 忠雄)



六甲男声合唱団 定期演奏会
2006.11.18 神戸新聞松方ホール



東京六甲男声合唱団 第2回定期演奏会
2008.4.12 浜離宮朝日ホール

六甲男声合唱団

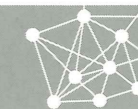
T1	岡田 登史彦	小林 和生	佐々木 英洋	正井 春吾	松岡 茂雄	鷲尾 隆三	
T2	赤司 健	河原 達	桐ヶ窪 卓	肥塚 禎夫	寺井 洋一	◎花岡 亜光	福井 紘
	藤原 達也	藤原 稔也	和久井 仁				
B1	浅野 洋	伊原 吉之助	浮田 順一	大谷 遷	加輪上 敏彦	丹下 豊吉	深井 邦男
	松井 嘉和	松村 恭一	安田 稔	山本 和洋	山本 稔	吉田 勲	
B2	東 尚良	石井 陽一	井上 和雄	大淵 覚	川島 國暉	田中 安夫	長央 徳太郎
	永岡 昇司	堀尾 和也	増川 真澄	吉田 哲朗			

東京六甲男声合唱団

T1	鈴木 英夫	竹本 鉄三	橋田 晋治	藤田 善弘	宮元 芳樹	三好 和通	
T2	井上 良彦	亀田 卓一	岸本 正義	佐名手 寿一	立岩 洋三	戸田 米造	備前 武一
	村瀬 宏						
B1	青山 徳次	◎大隅 孝二	佐原 博規	静川 靖敏	團野 廣一	藤本 淳三	横山 昭
B2	大野 紘	加藤 晋男	須田 健	高橋 榮輔	滝沢 章三	谷河 義久	藤田 享佑
	矢内 忠雄	柴本 芳郎*	中橋 誠一*				

◎は団長

*は合同演奏曲のみ



「ウィーン」の歌

「ウィーンわが夢の町」、「ヴィリアの歌」、「唇は語らずとも」、「美しく青きドナウ」、「ラデツキー行進曲」

19C後半～第1次世界大戦のウィーンは、ロンドン、パリに次ぐ欧州屈指の大都会として繁栄の時期を迎える。多様な民族が集い様々な芸術文化が花開いた。音楽においても、豊かな才能が集まり、12音技法等の革新的な音楽が創出される一方、市民階層が気軽に楽しめる簡明で美しい旋律を有する多数の名曲も生まれた。

1. 「ウィーンわが夢の町」 ジーテンスキー 1913年作詞作曲
 ヴィナーリートンの代表曲。ウィーンへの郷愁の思いを歌った甘美なスローワルツ。
 作曲者はウィーン大学法学部出身の同市のお役人で、今も残る作品はこれ1曲のみ。
2. 「メリーウィドウ」より「ヴィリアの歌」と「唇は語らずとも」 F.レハール 1905年初演。J.シュトラウスの「こうもり」とともにウィーンオペレッタを代表する作品。オペレッタはオペラより格下に見られがちだが、後にアメリカに渡りミュージカルになる。本作品は世界各地で公演されドイツ語の原題よりも英語題名の方が知られている。結婚後わずか8日で夫を亡くした若き美貌の大富豪未亡人ハンナと彼女を巡る男達の他愛もない恋愛喜劇。1曲目とともにこの2曲は、学生時代よりご指導いただいている荒谷先生に男声合唱編曲をお願いした。
3. 「美しく青きドナウ」 J.シュトラウス II世 1867年作曲
 1866年に普墺戦争に敗れ、落胆する国民を鼓舞するためウィーン男声合唱協会の依頼により男声合唱曲として作曲された。当初は不評であったが管弦楽曲に編曲され評判となる。
 歌詞も後に改作され、今ではオーストリアの第2国歌と言われている。
4. 「ラデツキー行進曲」 J.シュトラウス I世 1848年作曲
 1848年、オーストリアの支配下にあった北イタリアで勃発した独立運動を鎮圧したラデツキー將軍を讃えて作られた。ウィーンフィルのニューイヤーコンサートでアンコール曲として演奏される良くご存じの曲。

(黒田修一)



永井 宏 (Hiroshi Nagai) 指揮

マーキュリー・グリーン・クラブ常任指揮者
 一橋大学卒業。在学時代一橋大学男声合唱団コール・メルクール指揮者。
 指揮法を荒谷俊治氏(現在日本指揮者協会会長)、故浜田徳昭氏に師事。ピオラを東義道氏に師事。アマチュアオーケストラや合唱団の指導に豊かな経験を持つ。
 コールアネモネ常任指揮者 三井住友海上管弦楽団名誉指揮者。

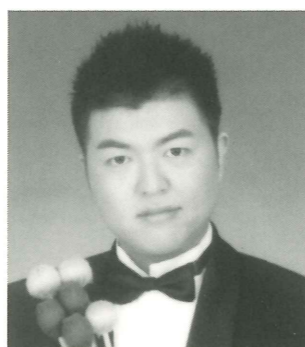


中野 マリ (Mari Nakano) ピアノ

桐朋学園大学ピアノ科卒業。お茶の水女子大学大学院修士課程修了(演奏学)。
 西尾悠美子、富本陶、演奏秀一郎の各氏に師事。リサイタル、オーケストラとの協奏曲の共演、伴奏などの演奏活動を行う。アメリカ・ペンシルバニア州の音楽祭、中国音楽家協会の招聘によるリサイタルが好評を得た。
 2000年よりマーキュリー・グリーン・クラブのピアニスト。

大場 章裕 (Akihiro Ohba) 小太鼓

東京音楽大学卒業。同大学卒業演奏会に出演。第22回日本打楽器コンクールにおいて第4位受賞。2007年ザルツブルグで行われたモーツァルテウム・サマーアカデミーに奨学金を得て参加。これまでに永野哲、菅原淳、岡田真理子、有賀誠門、久保昌一、藤本隆文、村瀬秀美の各氏に師事。



マーキュリー・グリーン・クラブの紹介

マーキュリー・グリーン・クラブ(MGC)は今年記念すべき創立10周年を迎えました。

本日共演する他校のOB合唱団に比べて未だ歴史の浅い男声合唱団ですが、本年3月に第6回定期演奏会を開催出来るまでに成長しました。創立以来、一橋大学男声合唱団コール・メルクールのOBを中心に、旧三商大の仲間や他大学出身の男声合唱を愛するメンバーの参加を得、常時活動するメンバーは約60名、毎週の練習出席率も85%を超える元気な熟年合唱団です。これまで定期演奏会に加えて、旧三商大OB合唱団交歓演奏会、友好団体との共演演奏会や賛助出演によりレパートリーを拡げて来ました。更に隔年に催す海外演奏旅行ではこれまで3回、南仏、南独、北イタリアの諸都市を訪ねて、国際音楽祭への参加、現地合唱団との交歓、慈善演奏会の開催など国際親善にも努めており、来年には英国への遠征予定、と活発な活動を展開しています。

団員常任指揮者の永井を中心に合唱に対する熱意は誰にも負けない団員達の、多彩なキャリアや人間性豊かな個性が醸し出すハーモニーに一層の磨きをかけ育てて頂いたのは、日本音楽界の大御所、荒谷俊二(日本指揮者協会会長)、田中信昭(東京混声合唱団桂冠指揮者)のご両氏です。懇切丁寧に「音楽を作る喜び」を手取り足取り教えて頂ける我々は正に果報者!心身ともに若さ(?)溢れる成長盛りの合唱団です。

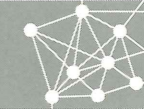
(藤原 尚)



マーキュリー・グリーン・クラブ 創立10周年第6回定期演奏会
 2009.03.21 東京オペラシティコンサートホール

T1	阿部 祐一*	石林 紀四郎	岡野屋 正男	小澤 荘二	錦木 孝和	関 顕介	田口 和義
	中尾 丈夫	中川 正機	中山 光雄*	二宮 洋二	藤原 浩	宮内 隆造	吉岡 省吾
T2	池田 信彦	石渡 尚夫	金井 洋	小室 滋	篠崎 博	太平 勲夫	田村 啓一郎
	長尾 明信	新田 晴男	野村 勇雄	平野 真	藤田 欣也*	益子 正稔*	松田 次郎
B1	石原 隆	井上 清彦	加藤 孝雄	黒田 修一	佐藤 雅之	高倉 勇	武田 三千男
	立川 昭夫	徳山 巖	永井 宏	◎蓮 隆詔	藤本 淳三	藤原 尚	星加 雄一郎
	正清 雄三	光瀬 靖彦					
B2	有馬 賢次	泉原 昭夫	葛西 敏昭	小林 迪之	酒井 宣彦	清水 嵩夫*	下村 肇
	住田 誠蔵*	竹内 克広	谷河 義久	野老 正明	中島 靖之	橋本 民生	日比野 英一*
	府川 朝次	村本 卓生	矢口 和彦				

◎は団長 *は合同演奏曲のみ



「月光とピエロ」——大学の自らを映すかピエロの姿——

堀口大学（1892～1981）の父九万一は外交官の草分けで、日清戦争後の朝鮮でクーデターを起こして閔妃殺害をさせた「閔妃暗殺事件」の当人である。幽閉されていた先王の大院君を厳重な警備をいかくぐって単独で秘かに訪ね、それを決意させたという豪胆な男であった。しかし息子の大学はまるで違っていた。母は早く亡くなり、外交官の父とは19歳まで離れて暮らした。親元はなれて学生生活を送りながら次第に詩の世界に引き込まれ、詩人の佐藤春夫や与謝野夫妻などと親交を結んだ。それを心配した父は彼を呼び寄せ、外交官にしようとしたが、彼の世界は別にあった。

南米やヨーロッパなどの各地で日本の公使令息としての生活を送る中で洗練されたフランス語を身につけ、フランスの文学に親しみ、すぐれた翻訳で日本に紹介した。それと同時に多くの詩を書いて日本で出版した。「月光とピエロ」もブラジル滞在中の1919年（T8）に自費出版したものである。

両親の居ない少年時代。メキシコ革命に遭遇し市街戦の渦中に。肺結核を患い、死に直面しながらスイスで孤独な療養生活。高名な画家で詩人の女性との恋。家族と別れての継母の母国ベルギーでの生活の侘しさ。それらは彼の詩に大きな影響を与えたに違いない。彼の作品の中に漂う寂寥感、無常の諦観のような底流、退廃的な匂いのなかの醒めたエロチシズム。それは様々な波乱の中で青年期を過ごした青年の心の現われだろうか。そのなかで自らを描いたとも思えるピエロの姿。それはマリー・ロランサンに焦がれる自らのかなわぬ恋を歌っているともいう。西洋の月は狂気のシンボルである。

曲は清水脩が自身組織した「東京男声合唱団」のために、1949年に作曲。男声合唱の定番である。1曲目だけにしか書かれていない曲想の doloroso（悲しく）はピエロの悲しさ、哀しさであり、まさに男声合唱ならではのダイナミックな表現と繊細さで歌い上げられる。

（MGC / 石林紀四郎）

エッセイ

三商大の思い出

私は在学中の4回の旧三商大交歓音楽会のうち1回生の第2回、4回生の第5回の2回は東京開催になるというラッキー？に恵まれました。1956年6月私にとってグリー初の大舞台となった第1回京阪神三大学（京大男声、神戸大グリー、大阪市大グリー）交歓合唱音楽会から1週間後、夜行列車で上京、中央線の国立駅に降り立ちました。当時国立の広い大学通りの両側はまだ家も疎らでした。

暫時休息後、石丸泰郎先生の指揮で三大学合同オーケストラと「巡礼の合唱」の練習を行いました。6月22日の演奏会場は日本青年館、建て替え前の音響効果はともかく石造りの立派な建造物でした。

4回生の1959年は1回限りで終わっていた京阪神三大学交歓音楽会を第2回として復活させ、6月11日に大阪の毎日ホールで開催、数日後の16日早朝東京駅に、ホームで洗顔・歯磨きをすませて国立の一橋大学に直行、殆ど休憩もないまま荒谷俊治先生の指揮で三大学合同オーケストラと共に合同合唱曲タンホイザーの「巡礼の合唱」とファウストの劫罰から「フーガ」の練習が始まりました。新進気鋭の荒谷先生の熱血指導が終わると疲労困憊、おもわず座りこんだことを鮮明に記憶しています。翌6月17日、神田共立講堂での第5回旧三商大交歓音楽会は大盛況で成功裏に終わりました。この東京開催の1956年、1959年ともに関西合唱コンクールでの入賞も果たしたラッキーイヤーとなりました。

（南澤会合唱団 / 米田直也）

「ピエロ」に始まり「ピエロ」に終わる



丁度50年前、1959年6月に神田共立講堂で開催された旧三商大交歓音楽会で、我々神戸大学グリークラブは「月光とピエロ」を演奏した（指揮田中安夫さん）。この年の我々は、その後も夏の仙台公演、秋のコンクール、暮れの定演と、まさに「ピエロ」漬けであった。

その後一度も歌ったことが無いその「ピエロ」を50年ぶりに、再び東京でしかも同じ三商大交歓会（今度はOBとしてではあるが）の場で歌うことになった。古希を過ぎたわが身にはもう一度という機会はあるまい故、東京での三商大は「ピエロ」に始まり「ピエロ」に終わることになりそうだ。それは偶々そうならただけのことかもしれないが、私には何か偶然以上に、三商大の

舞台のために特別に書かれたシナリオのような気がしてならない。この度の合同演奏では、東西に離れて一緒に歌う機会がめったに無い昔の仲間のみならず、三商大の合唱仲間全員で歌えるのは嬉しい限りであり、「ピエロ」を介して50年の時空を超えた三商大の合唱人の縁を感じる。

だが残念なことに、50年後のこの機会を待たずに旅立った仲間がいる。晩夏の夕刻のひとつき、散水したばかりの庭で水割りのグラスを片手に、白く輝く雲が茜色に染まりそして程なく全体が薄墨色に移ろうさまを眺めながら、先に逝った彼らと共にしたグリー時代を憶った。

しかし今日は、「ピエロ」を歌うことができる特権を満喫しよう。亡き友たちのために祈りをこめて。

（六甲男声合唱団 / 花岡亜光）

あれから半世紀



1960年夏、神戸国際会館で開催された旧三商大交歓演奏会への参加には、今でも懐かしく思い出されるエピソードがあった。

この年は、数多くの学生達を巻き込んだ所謂60年安保闘争の真っ只中であり、抗議集会やデモ行進、時には警官隊との激しい衝突といった事態が繰り返されていた。こうした時勢にあつて、演奏会で歌うために大挙して関西まで出向くことに対して、何か割り切れないものを感じる部員達が少なくなかったのである。そこで、一体どうしたものか部員総会で討論を重ねた結果、現地で安保反対を訴える行動もとることにしようということになった。

そして無事交歓演奏会に参加した翌日、部員一同三ノ宮駅頭に立ち、夏の強い日射しの下でピラ配りと活動資金のカンパを行ったのだった。

当時のグリー部員数は約70人、数ある文化部の中でも一際隆盛を誇っていたと思う。しかし、いつの頃からか学生達のグリー離れが加速し、近年ではどの大学でもグリー部員が激減しているようである。今や現役世代の旧三商大交換演奏会も、その開催がままならぬ状態に至っていると聞く。

三ノ宮駅頭でピラ配りをした日から半世紀、OBグリーによる交歓演奏会に参加出来る喜びをかみしめながら、いつの日か又若者達が、奥深い魅力に満ちたグリーの世界に大挙戻ってきてくれることを切に願うものである。

（MGC / 新田晴男）